

第1話 後三條天皇の英邁

ひさ ちょうてい せいじ こころ ふじわら えいまい ご じょう しんせい とみ
 久しく朝廷の政治を心のままにしていた藤原氏も、英邁な後三条天皇の親政で頓に
 せいりよく うしな しらかわほうおう いんせい はじ せつしょうかんぱく まった
 勢力を失う。 ついで白河法皇が院政を始められてからは、藤原氏の摂政関白は全
 めいぎ やくめ
 名義ばかりの役目となった。

藤原氏が衰え始める

せいわ みよ よしふさ せつしょう こころ
 第56代清和天皇の御代に、藤原良房がはじめて摂政となって以来、藤原氏は久しく朝廷の政治を心
 のままにしていたが、皇室と藤原氏とは特別にご縁の深い関係があったので、上下共深くもこれを咎めな
 かった。ところが、その勢力がますます盛んになるにつれて、次第にわが儘を始め、ついに道長に至っ
 てその絶頂に達しました。

「この世をば望月の欠けたる事もなしと思えば」と、彼は僭越極まる歌をさえ詠み、その子の頼道は
 また、「朝廷の事は後まわしにしても法成寺の御用は怠るな」というが如き不埒極まる命令を諸国に下
 して、道長の建てた寺の工事を急がせた。（これらの事は第一巻「神代、奈良・平安時代」の「第33
 話 藤原氏の専横」の話に詳しく書いた。）

けれども、満月がいつまでも虧けずにいる筈はなく、一個人の事業のために、国家の費用や民の力を
 使うようなことが長く行われる筈はない。頼道を経て弟の教道の時代となると、たまたま英邁な後三
 条天皇が位に即かれて、政治をご親裁になり、思いきって藤原氏をお抑えになったために、忽ち彼らはそ
 の勢力を失いました。

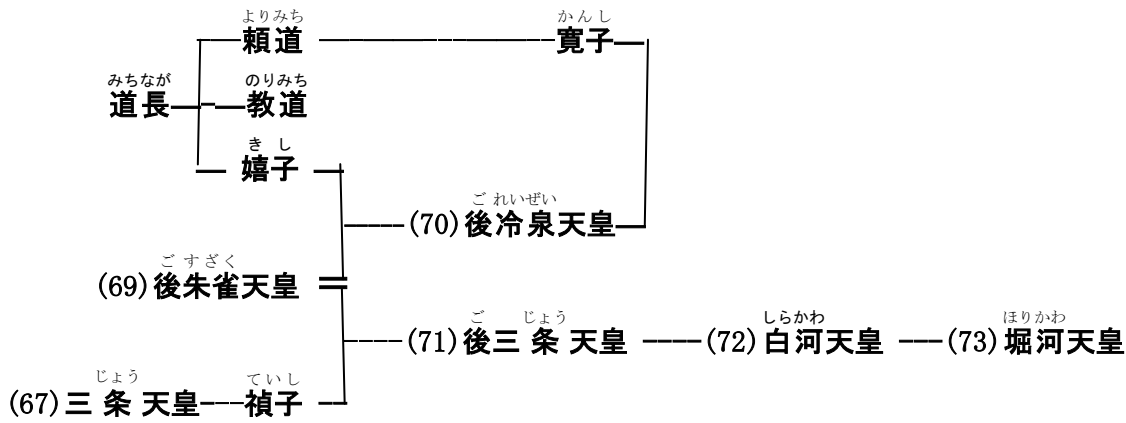
東宮時代の後三条天皇

ご じょう ごすざく な たかひとしんのう
 第71代後三条天皇は後朱雀天皇の第二の皇子で、御名を尊仁親王と申しました。ご幼少の時から
 すこぶ けんめい ごれいぜい さい こう
 頗る賢明でしたので、御父天皇は深く愛されて、第一の皇子が立って後冷泉天皇となられた際に、その皇
 太弟となされたが、尊仁親王の御母は三条天皇の皇女禎子内親王で、藤原氏の娘ではなかったため、関
 白の頼道は親王がご即位になる事をよろこばず、自分の娘を後冷泉天皇の皇后に納れて、皇子が生まれる
 のを待っていた。皇子が生まれれば、改めてその皇子を皇太子に立てようと考えたのです。

壺切の劔

それで、第59代宇多天皇の時から、立太子の際には必ずお渡しになる皇太子の御するしである壺切の
 つるぎ つるぎ つるぎ つるぎ つるぎ つるぎ つるぎ つるぎ つるぎ つるぎ つるぎ
 劔をさえ、頼道は尊仁親王にお渡ししなかった。一たいこの壺切の劔というのは、元は藤原長良が持
 っていて、その子の基経が朝廷に上ったもので、頼道は、「たとえ東宮でも藤原氏に縁のない方には差し
 あげられない」と、それを理由としたのです。なんとという無礼な言い分だったでしょう。

第1話 後三条天皇の英邁



けれども、^{たかひとしんのう}尊仁親王はそんな事には少しも^{とんちやく}頓着されなかった。^{わた}渡すべき物を^{わた}渡さないのにその罪は誰れにあるかと^{おお}仰せられただけで、其の後も藤原氏のたびたびの^{ぶれい}無礼やわがままをよく^{しの}忍ばれながら、^{おおえのまさふさ}大江匡房を師として学問に^{はげ}励み、^{こと}殊に内外の歴史には最も^{そそ}御心を注いで、深く政治の道のご^{しゅうよう}修養に^{つと}努められていました。それが12才で^{こうたいい}皇太弟にお立ちになった時から35才まで、実に23年の長い間の事でした。

其の間、^{あいだ}頼道は自分の娘に皇子の生まれるのを^{まちとお}待通していましたが、ついに^{ごれいぜい}後冷泉天皇には皇子がなくて^{かく}御崩れになったので、乃ち^{たかひとしんのう}尊仁親王は立って^{くらい}位に即かれた。これが第71代^ご後三条天皇で、^{うだ}実に宇多天皇の後で、11代、170年を隔てて^{へだ}珍しくも藤原氏の娘を母としない^{しんのう}親王が天皇になられたのです。

御親政

^{よりみち}頼道は其の時はもう80に近い^{ろうれい}老齢でもあったが、第一に、今までの自分の^{おこな}行いからも^{えいまい}英邁な天皇を^{おそ}恐れていたもので、^{そく}ご即位に先立ち、あわてて^じ関白を辞して^{うぢ}宇治の^{びょうどういん}平等院に^{いんきよ}隠居しました。それで、弟の^{のりみち}教道が代わって^{とうぐう}関白となったが、^{とき}天皇は^{つね}東宮の御時から常に藤原氏の^{せんおう}専横を^{いきどお}憤っておられたので、これを抑えるために御自分で政治をなされ、^{のりみち}教道にはご相談することもあまり多くなかった。そのため、^{いきお}藤原氏の^{とみ}勢いは^{おとろ}頓に衰え、^{いこう}皇室のご^{にわ}威光は俄かにまた^{くわ}加わりました。

記録所の新設

さて、^ご後三条天皇は藤原氏のために^{ひさ}久しく^{みだ}乱れていた政治を正して、^{ただ}民の^{たみ}幸福を^{こうふく}図ろうとされ、^ま先づ第一に、^{はじ}初めて^{きろくしょ}記録所を^{もう}設けて^{しょうえん}荘園を^{とりしら}取調べられた。そもそもこの^{しょうえん}荘園というのは、特に^{しゅう}朝廷から^{しゅう}私有を^{ゆる}許された土地の事で、^{そせい}租税を^{おさ}納めなくてよいことになっていたもので、いつからともなく、^{せいりよく}勢力のある^{こうじつ}者は何かと^{もう}口実を^{めいぎ}設けてはこの^{もと}名義の下に多くの土地を^し占めて、^{こくし}国司の^{しはい}支配を受けず、^うほしいままに^{てんか}天下の^{とみ}富を^{わたくし}私するようになっていたのです。

中でも藤原氏の^{ごと}如きは、その^{いちもん}一門の^{むすう}荘園が全国にわたって^{のぼ}無数に上り、したがってその^{とみ}富は皇室にも^{いせい}過ぎるほどで、^{ごうしゃ}威勢も^{きわ}強く、^{きわ}豪奢をも^{きわ}極めました。

しかし^こ斯うして^{そせい}租税のない土地が多くなれば、^た他の土地の^{おも}租税はますます^{おさ}重くなって、これを^{たみ}納める

第1話 後三条天皇の英邁

はおお くる すなわ はたら いっぱん まづ たみ おも ぜい か おご ふけ
は大いに苦しむ。 即ち、働いている一般の貧しい民には重い税を課して、奢りに耽って遊んでいる貴族は税も納めずに富んで勢力をもっていたのがその当時の有様でした。

あき まちが すなわ へいがい のぞ
これは明らかに間違っていることなので、乃ち天皇はこれらの弊害を除くために記録所を設けて、親しくそこに臨んで荘園の取調べを監督なされたのです。

荘園の整理

それで、新たに置かれた荘園はいうまでもなく、古いものでも證書の明らかでないものや、国家の政治に妨げのあるものなどは、ことごとくこれを停めさせられた。

このご英断に依って、藤原氏を始め大荘園の持ち主らがいかに大きな打撃を受けて驚き恐れたかは容易に想像されると共に、又、今まで久しく重税に苦しんでいた一般の民が、一時に頭を上げて、喜びの声を挙げたことも容易に想像されます。

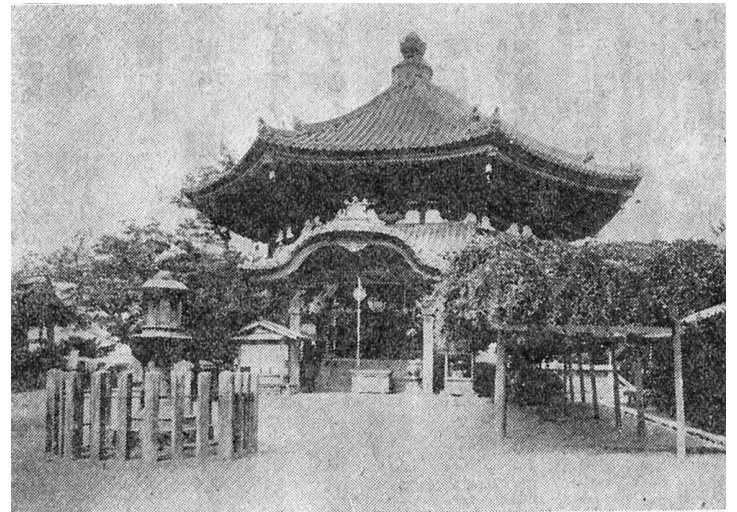
とはいえ、藤原氏の勢力が衰えたとはいっても、長い年月にわたって植付けられたものですから、どこかにまだ根強いところがあった。奈良の南園堂の工事に就いて、天皇が関白の教道の請いを止む無くお許しになったのなども其の例の一つです。それはこうです。

国司の重任を禁じ給う

ご じょう そくい ぜんせい こくし にんき み かせ
後三条天皇はご即位以来、しきりに善政を行われたが、その一つに、国司の任期の満ちた者が重ねてその任に當るのを固く禁じさせた。同じ役人が同じ土地に長くいると、さまざまな弊害の起ることが多いという事を以前からお気づきになっていたので、特にこれを禁じられたのです。

関白教道の強請

ところが、其のころ、教道は藤原氏の氏寺である奈良の興福寺の南園堂を再建しかけていたが、それがまだ出来上がらないうちに、その工事の監督を命じていた大和の国司の任期が満ちた。それで教道は特に願って、大和の国司だけは此のままもう一度役につかして置いて下さるようにと申し上げた。天皇は、一旦定めた国の規則を或る一家のために破るのはよろしくないと言せられて、お許しにならなかった。



奈良 興福寺の南園堂

のりみち さいさんおしかえ ぜ ひ し
教道は、再三押返して、是非ともお許し下さるようにと強いて願った。

すると天皇はついに大にお怒りになって、「関白、摂政の重くおそろしいのは、天皇の外祖父でもあればの事だ。朕は何とも思わんぞ！」とお髯をふるわして仰せられた。教道は座を立ったが、御殿を出る時に、大声で、「藤原氏の公卿は皆立て。春日大明神のご威光も今日で尽きたぞ！」と言いつつ放って出た。すると藤原氏の公卿は全く一人も残らず皆座を立て、教道と共に出てしまった。春

第1話 後三条天皇の英邁

日大明神は即ち藤原氏の氏神ですから、其のご威光が尽きたというのは、とりも直さず藤原氏はもうだめになったという意味なのです。

ところが、其のころの朝廷の重要な役目は、大抵藤原氏の一族がやっていたので、その人達がいなくなつては政治の上にも直ぐに差支える。これには天皇もさすがにお困りになって、関白の教道を始め、藤原氏の公卿を召還させられ、改めて教道の願いをお許しになった。しかし、斯うして教道は一度は目的を達したけれども、これから後は大いに天皇を恐れて、その行いを慎むようになったといひます。

奢侈を戒めて儉約を勧め給う

また、そのころの世の中は、藤原氏の榮華の影響を受けて、一般に贅沢に流れていたが、とりわけ役人が甚だしく競つて大きな別荘を造つたりして、奢りに耽つていた。後三条天皇はこの風を見て喜ばず、御親らは儉約を守られて、日々の膳部を始め、お手まわりの品々まで、すべてを驚くほどに質素にされた。

嘗て石清水八幡宮においでになった時に、拝観者の車に飾りの金物の打つたのがあるのをご覧になると、わざわざ御車をおとどめになって、ことごとくそれを抜き取らせられた。天皇が御身を以つて模範をお示しになるこの儉約のおぼしめしは、間もなく一般によく行き渡つたらしい。其の後、賀茂の社においでになった時には、目に立つ車などは一つも無かつたほどに一般に質素になっていたということです。



京都 石清水八幡宮 (山城国 綴喜郡 八幡町)

こういふように、天皇はすべて世の中を良くして、人々の幸福を進めるのに都合のよい政治をされたので、世の悪習は大いに改まり、人心もまた頗る引き締まって来た。しかし、在位僅かに5年で位を御子の白河天皇に譲つて上皇となられた。

これは、これまで藤原氏がいつも幼少な天皇を立ててその摂政や関白となって政治を心のままにするのを憎まれて、位をお譲りになった後も政治をご覧になって、藤原氏にわが儘をさせないようにしようとおぼしめしたからです。

頼道、天皇を惜しみ奉る

ところが上皇は、不幸にしてその翌年の5月、病氣のためにお崩れになり、十分にその志を遂げられなかつた。時に御年40でした。天下の人々が斉しく悲しんで惜しみ奉つたのはいうまでもないが、天皇を憚つて宇治に退隠していた前の関白頼道ですら、これを聞くと、折から食膳に向かっていたが、覚えず箸を落として、「ああ、こんなにも早くお崩れなされたのか！ 御国の不幸は此の上もない。」といつて歎いたということです。

第1話 後三条天皇の英邁

この頼道よりみちの言葉よに依よっても、いかに天皇めいくんが明君であったかが分かります。

院政いんせいの始め

第72代白河天皇は御年20で位につかれた。御父ごさんじょう後三條天皇の志こころざしを継いで、ご自分で政治をなさること十四年、34才で位を子の堀河天皇ほりかわに譲ゆづって上皇じょうこうとなられたが、その後も、そのお住まいである院の御所で政治まかをご覧になった。堀河天皇ほりかわがまだ8才のご幼少でしたからですが、一つは藤原氏に政治を委せまいとしてであります。院の御所で政治をなされたので、これを院政いんせいといった。この院政は、これから後、可かなり久ひさしく行おこなわれたので、藤原氏の摂政や関白は、この後は全く名義めいぎばかりの役目となって、政治いっこうのうえには一向に勢力がなくなりました。

(第1話 後三條天皇ごさんじょうの英邁えいまい 終わり。 次は前頁に戻り、 第2話 源氏げんじの勃興ぼっこう へ)